

第3回 生駒市環境審議会ごみ減量化専門部会 議事録

【日 時】 平成21年11月25日(水) 午前10時～12時20分

【場 所】 生駒市コミュニティセンター 201・202会議室

【出席委員】 森住部会長、藤堂部会長代理、中西委員、田村委員、高木委員、大内委員、
谷川委員、小林委員

【欠席委員】 なし

【事務局】 清家生活環境部長、山本環境事業課長、中谷環境事業課長補佐、吉岡事業係
長、西田管理係長
㈱地域計画建築研究所小泉部長

【配付資料】

平成21年度第3回生駒市環境審議会ごみ減量化専門部会会議次第

資料1 プラスチック製容器包装の分別収集とリサイクル方式の比較検討

資料2 プラスチック製容器包装のモデル収集に関するアンケート比較表

資料3 第1回 生駒市環境審議会ごみ減量化専門部会議事録

【議事内容】

1 開会（事務局）山本

- ・開会宣言
- ・資料確認
- ・議事録の署名 大内委員 谷川委員

2 森住部会長

案件の資料説明を事務局よりお願いする。

3 資料説明（事務局）山本

資料1 プラスチック製容器包装の分別収集とリサイクル方式の比較検討

4 案件

森住部会長：質問をお願いする。

田村委員：可燃ごみのルートを整理すると、どれだけ経費が浮くのか。

事務局：細かいところまで整理出来ていないため、次回に説明する。

中西委員：パターン1・2・4には問題点に「プラの木・金の午後収集は午後3時頃もあり」と入っているが、パターン3にないのはなぜか。

事務局：木・金の午後だけで一往復は不可能なため、木・金も収集することになれば朝から別の車を出すことになる。

中西委員：午前から回収するため、午後3時頃には終わっているということでよいか。
パターンは4つに分かれているが、2と3は遠いか近いかの違いで、実際のパターンは3つで良いか。

事務局：パターンを挙げたのは、市で始め1億2千万円の想定にしていた、パターン3の600tの年間8,500万円のところである。金額の違いには、当初は独自ルートで計算し、専用袋の配布も含まれていたことによる。

事務局：基本的パターンは3つである。パターン3の長所にある「複数社による競争入札を導入できる可能性がある」はモデル事業で実施している業者のため除いてほしい。

中西委員：市内の会社が収集し市外の施設に搬入していることで、搬入先の市民感情を害するおそれがあるとあるが、モデル事業の反応はあるのか。

事務局：市民からの反応はないが、搬入先の自治体と協議をしているため、市民に情報が流れていると考える。

中西委員：今は問題がないが、数が増えてくると今後はわからないということか。

小林委員：現在搬入している所は、全国から集まってくるような大きな会社で、他市の搬入はそれほど問題にはならないかもしれない。

森住部会長：ここは中間処理施設なので、建設時に市町村の許可と地元の同意が得られています。後から他の行政が加わる時も、市町村の許可を取り、地元の説明しているため、事実上は問題がないはずである。

中西委員：パターン2で、今と違う別の業者になると新たに手続きが必要になってきますね。

小林委員：どこになるのか。

事務局：パターン2は、東大阪市を想定している。

藤堂委員：受けるところによって処理費用は変わってくるのか。

森住部会長：複数になり競争入札になれば安くなり、ここでは3万円/tに設定しているが、八幡市は2万数千円/t、兵庫県柏原市は2万8千円/t、松原市も同じぐらいである。

藤堂委員：パターン4の4万円/tも同じように安くなるのか。

事務局：安くなる。

藤堂委員：パターン1が一番安くなっているが、競争の可能性を残した方が、流動性がある。パターン4のストックヤードは用地などの目途はあるのか。

事務局：現在のリレーセンターでは手狭で、広い用地の確保が必要になる。地元の理解等、問題があり目途は立っていない。

中西委員：可能性はどのくらいか。

事務局：難しい。市有地を1か所想定しているが、土地利用の転用、進入路の確保、地元の理解等の問題があり時間がかかる。

中西委員：数年かかるか。パターン1も同じように時間がかかるか。

事務局：パターン1は、現在の可燃収集業者なので、設備投資をしようという意識は持っているが、来年の10月頃は難しい。

小林委員：ここでは、どうやって処理しているのか。

事務局：600t/年なら処理可能だが、1,200t/年まで増えるとストックヤードの確保が難しい。

小林委員：ここでは、設備が整うまでストックヤードだけ設置して、市外の民間業者へ運ぶ方がいいのでは。パターン1であっても当面はパターン2の状態で運営してはどうか。

中西委員：現在の業者が一番早く対応できるのは、ストックヤードの整備ということか。パターン1と4は、来年度の稼働は難しいですね。1の業者は生駒市に土地をもっているのか。

事務局：来年度中は難しい。土地は持っている。

田村委員：その業者とは、可燃ごみについて、随意契約か。

事務局：平成20年から5年間の長期契約である。

田村委員：問題点に挙げられているが、随意契約が続くことはデメリットが大きいのか。

事務局：競争によって価格を下げることを考えると、入札が望ましい。

事務局：昨年から、生駒市全体の契約の透明性と競争性を確保することになった。今すぐ競争できる相手がないため平成24年までは長期契約だが、その間に競争相手を探すことになっている。ただ、生駒市のごみ処理となると、設備や車両基地、ノウハウ等を持つ業者でないと難しいため、競争相手がなければ随意契約となる。

森住部会長：これは実態をわかった上で議論しないと、随意契約が高くつくということだけでは難しい。安い業者は、処理賃を抑えて中国など輸出したりしている。値段だけで業者を選ぶと、真面目な業者が潰されることにつながりかねない。その為には、適正な利益率を設定し、業務監査や会計監査をしっかりと、その上できちんと業務をする業者と随意契約する。もう一つは、下で働いている人のみ残して、経営者のみ変わる方法などもある。

事務局：自治体の契約は競争入札が前提ということで難しい。次の検討委員会で検討してほしい。

小林委員：パターン1に減価償却を含むとあるが何年ですか。減価償却期間が過ぎると安くなるのか。

事務局：安くなる。設備投資の減価償却期間は約5年としている。

森住部会長：政府によって物の減価償却の期間が決められている。この金額は業者が示してきたもので、期間を過ぎても値段が変わらなければ下げようと言える。会計を透明にすれば随意契約でもいい。

小林委員：減価償却が7年ならば、7年後は競争入札にすることができるのか。

事務局：長期契約の理由づけ次第である。

藤堂委員：生駒市の業者の設備投資ができれば、生駒市以外の処理も受けることになるのか。

小林委員：そうすると、他都市のごみが生駒市に入ってくる。

森住部会長：業者は、設備投資のとき他都市の処理も見越して大きく作ると後に有利となるが、行政としては、減価償却が終わるまでは生駒市の処理を保証してもらわなければならない。その後は競争入札という契約もある。

小林委員：地元には反応がある。

事務局：他市のごみを処理するには許可が必要になるので、減価償却後に生駒市の処理ができなくなれば、許可についても検討することになる。

森住部会長：今から業者は地元と良い関係を作らないといけない。

大内委員：今は北田原に土地があって施設を作るスペースもあるのか。

事務局：広くはないがある。

藤堂委員：現在はパッカー車を止めてあるだけですが、施設ができた後は、ごみを積んで週に数日戻ってくることになる。

事務局：用途地域は準工業地域ですが、道路基盤が整備されていない。整備計画はあるが、10tトラックのすれ違いは無理で、道路を造るのにも数年かかることになる。

藤堂委員：現在でも道が狭く、工場地域に入るトラックによる交通問題がある。

小林委員：ではパターン1はしばらく無理で、2か3になる。

事務局：現在、2トンと3トントラックで、延べ27台で水曜日に収集する計算になります。

森住部会長：分別基準適合物は10t車で引取りとあるが、この時点で無理ではなる。

事務局：現在でも10t車で入れるが、周辺道路の交通規制が必要になる。

藤堂委員：近隣に住んでいるが、規制をしても大型車が住宅地を通っていく。

事務局：都市計画決定の手続き時間が必要です。業者は計画図面を作っているの、都市計画決定の手続き待ちである。

森住部会長：1と4は数年かかる。

事務局：段階的に仕組みを作っていくことになる。最短で都市計画決定と住民の同意が必要なので1年程度と思う。

小林委員：住民への周知にも1年はいる。

事務局：半年から1年。課題はインフラ整備が十分でないことである。

森住部会長：当面の課題として、週の収集回数を増やすと600tから1,200tになるという数値の見直しが必要。モデル地区の600tは協力率が低いとみなされる。容器包装プラスチックは汚れがひどい場合は出さなくて良いなどの要件があり、その量を分母から外さないで協力率が低くなる。また何軒の家が協力しているのか、一軒当たりの回収量など、協力家庭の比率を出すことが必要ではないか。

大内委員：モデル地区の表の見方がわからない。

中西委員：1,200tは他の自治体の例で、モデル地区の600tは半分だとみられることにもなる。

藤堂委員：食品トレイは別途回収拠点に出すようになっているが、それが数値の差に出るはず。

中西委員：協力率で出さずに、量で考えればいいのではないか。モデル地区ではどれだけの量が集まり、モデル地区は生駒市の何%に当たるので、生駒市全体に換算するとこれくらいという出し方が良いのではないか。

藤堂委員：食品トレイや発泡スチロールが収集途中で破損してしまい再生に生かされていない問題で、スーパーの協力を要請したい。であれば容器包装プラスチックが全て回収されていることにならなくなる。

大内委員：今はリサイクル方式を比較検討しているが、協力率や量によってパターン1が2になるというように、リサイクル方式が変わるわけではない。

中西委員：方式は変わらないが、費用が変わる。今までの議論だと、安ければ良いという

ことで、最終的にはパターン1が良いとなっているが、果たしてそれで良いのか。行政なので競争入札が基本となるが、費用の安さだけでなく、地元産業の育成ということも意識として必要ではないか。

大内委員：地区内処理からもパターン1が良い。雇用からも。

中西委員：地区内処理の場合、同市の中でも、北田原から離れた住民は良いと、近隣住民は良くないとなる。県外への押し付けの良し悪しなど考えることがある。

田村委員：モデル地区の数年分のデータを元に出た600t/年を基準に、同じ隔週収集で始めたら良いのではないか。他都市の数値ではわからない。協力率は、汚い物を省くことや、別に持っていく方が大変なので、その方が協力度合いとしては大きいはず。

森住部会長：協力率ではなくて、モデル地区は600t/年、他都市は1,200t/年が実際出された量。予想回収量とする。パターン1と4は来年度には難しい。1月に予算を出すので、暫定的に来年度に向けてどうするか詰めていかなければならない。

小林委員：パターン2のC社は、少量だと引き取ってもらえないので、3になっているのか。

森住部会長：パターン3は費用が高いし、一日一回の収集だから、2に切り替えられないかという議論。

事務局：このときは、モデル地区のみで、容器包装リサイクル協会の認定が受けられず、パターン3しか独自ルートでリサイクルできなかった。

小林委員：次は生駒市全域なので、認定は可能であるということか。

事務局：そうである。

森住部会長：来年度からは、全域でするならパターン2が良いとなるだろう。

小林委員：周知するには時間がかかる。

事務局：周知と方式の問題は別。周知は必ず必要。今は方式について議論していただきたい。

小林委員：予算を挙げるなら、パターン1は多くの手続きが必要なので無理。全域の収集

を見越してパターン2が良いとなる。

森住部会長：ただ、周知期間があるので来年4月からは無理。10月以降になる。

事務局：来年10月からするにしても、指定法人にする申込期限が過ぎているので、来年度は独自ルートのパターン3になる。

中西委員：独自ルートにすると、どうしてパターン3になるのか。

事務局：パターン3でなくても良い。

森住部会長：選別梱包費を出すのは同じ、選別梱包しても容器包装リサイクル協会の回収がないため、業者で処理するが、価値がないので自己のルートで売れない。その処理分だけ生駒市が費用を出すことになり独自ルートは高い。費用が出れば請負う業者は他にもいる。

事務局：燃料リサイクル業者は独自ルートでも多くあるが、材料リサイクルを独自ルートでできる業者は少ない。材料リサイクルにした方が環境負荷の面から良いということ、今までは材料リサイクルにしてきた。

大内委員：勉強会で、CO₂の面からはケミカルが1番、燃料リサイクルが次に良いと聞いたが。

森住部会長：燃料リサイクルは、容器包装リサイクル法で、違法ではないが積極的には薦められてはいない。

中西委員：理念として、まずマテリアルとして使用すること、石油を使用するより良いが、燃料にすると資源が消えてしまうので、あまり推奨されていないということになる。

小林委員：前回の勉強会では、まずマテリアルリサイクルに回すのが良いのかという意見があった。一番推奨されているパレットは、3倍重くて耐久年数も3年ほどしかないかどうか。ケミカルリサイクルに回すことができれば意味がある。リサイクルを選びたい。

大内委員：石油が減らせるなら、燃料リサイクルも良い。選べるのであれば、燃料リサイクルの独自ルートが良いのではないか。

森住部会長：その場合は、現在の業者（三重中央開発）が、利益率が高い選択をすること

になる。独自ルートはここしかない。材料と燃料のリサイクルができる施設になっている。問題は、行政が燃料化の費用を払うことである。

事務局：RPFを作る業者は、他にもあるが同じ距離ほど離れた所にある。

森住部会長：RPFの業者に持っていった場合と、コストを比べたら良い。

中西委員：現在、RPFは普及しているのか。

森住部会長：石油よりも値段が安いので、セメント会社や製紙メーカーが使っている。

中西委員：どこまで燃料として使うメリットがあるのか。RPFは普及しているイメージがない。近年では、ごみの燃焼でダイオキシンはあまり出なくなっているが、RDF利用が環境に良い方向で話が進んでいるので少し気になった。

小林委員：マテリアルリサイクルは推奨すべきなのか。

中西委員：マテリアルリサイクルにするのが良いのは間違いないが、全てが良いのかは考えなければならない。まずは資源を減らさない方法としてマテリアルだが、使えないものにリサイクルするならば、次の使い方（燃料等）にするのも十分考えられる。

森住部会長：評価指標はCO₂の削減率で、燃料にできるかどうかで評価できる。他に、容器包装プラスチックを省資源率で評価すると、マテリアルリサイクルは45%で評価が低く残りは燃やすことになる。ケミカルリサイクルは85%で、マテリアルリサイクルに優先権を与える理由がなくなるが、ケミカルリサイクルを選択できないことに無理がある。マテリアル優先の理念は良いが、容器包装プラスチックリサイクルの現実とはかけ離れている。

中西委員：ペットボトルはマテリアルリサイクルが良い。廃プラは何が入っているかわからないという問題がある。

小林委員：容器包装リサイクル協会を通さないで、独自ルートがある業者を探した場合、パターン2とのコストの違いはどのくらいあるのか。

森住部会長：独自ルートは高い。容器包装リサイクル協会を通せばリサイクル費は払わなくて良いが、独自ルートは行政がRPF化も含めてリサイクル費を払わなければならない。

小林委員：3,285円/tは容器包装リサイクル協会の認定を受けての価格か。

森住部会長：それは行政が払う排出する中小企業分。容器包装リサイクル協会の認定を受けての価格ではない。

小林委員：選別作業委託費等の3万円/tなどは、容リ協会を通しての価格で、通さない場合は更に高くなるということか。

事務局：コストの面からは、容リ協会を通すことが前提で、通すことができなければする意味がない。

森住部会長：今モデル地区で集めているのを来年どうするかという議論。全地域に広げるのか、三重中央開発以外があるのか。集める練習と考えると燃やすこともあるし、モデル地区を変えることもあり得る。

田村委員：容器包装リサイクル協会を通すには1年先延ばし。申込みはいつからか。

事務局：11月の始めからである。

田村委員：11月に申し込んで、4月から開始となると周知に半年取れることになる。

中西委員：1年遅れることで、その間モデル事業を維持するかどうかということである。

田村委員：モデル地区で集めて三重中央開発に持っていくのか、燃やしてしまうのか。

森住部会長：モデル事業をやめること、他の業者を探す選択肢もある。

田村委員：モデル地区で集めた方が、年間の収集量とコストがわかるし、収集日を毎週か各週にするのか決めることの判断材料ができるのではないか。

藤堂委員：集めて燃やすのは良くない、燃やすなら分別なんてしない。コストがかかってもリサイクルを続けるモデル地区の継続か拡大。もしくは廃止になるのではないか。コストの面でモデル事業の廃止もあるとは思いますが、同じコストを掛けるなら、公報で周知徹底を図るなどの工夫があっても良いのではないか。

森住部会長：モデル地区を拡大しなければ、積載量を増やして回数を抑えることはできるのではないか。

事務局：現在のモデル地区の周辺で拡大のお願いしているが、なかなか協力が得られていない。

森住部会長：では、協力を得る方策を検討するために来年度はモデル事業を継続するとよいのではないかな。

事務局：今年も自治会にお願いに行っているが、手間が掛かると、週1回の回収でないと駄目だという意見などで、まとまりきれていない状況である。

田村委員：回収回数を、週1か各週にするかは、いつ誰が決めるのか。

森住部会長：この場で案を出して、行政が承認すれば決まる。

藤堂委員：家庭にもよるが、2週間で一袋位。かさ高いので置場に困るが、出し忘れても臭いは問題ない。

森住部会長：現在、三重中央開発に年間いくら払っているのか。

事務局：処理量は年間100～150万円位である。収集も同じく年間100～150万円位である。

森住部会長：モデル地区を拡大して、回収が倍になってもそれほどかからない。では、モデル地区で回収率が上げるための社会実験をするのはどうか。社会実験ならば、週1回収集に増やす地区やモデル地区の拡大も考える。

事務局：資料2・プラスチック製容器包装モデル収集に関するアンケート比較表の③で収集頻度があるが、隔週でちょうど良いが年々減ってきて、週に1回必要が増えてきている。

藤堂委員：地域によって違ってくる。北大和は若い世代が多いので家族の人数も多くなる。

大内委員：ごみ収集日が増えることで、ごみ当番が増えることが気になる。

森住部会長：審議会では、モデル地区の現状を審議して、来年度の方向性を出さないか。もう一つは、総合評価表で点数を付けて市民に分かるようにするコンサルに次回までに総合評価案と評価基準を出してもらいたい。

事務局：時間的には可能か。

森住部会長：省資源化率、協力率、省エネ率などの項目で、現在の焼却と、ケミカル・サーマル・マテリアルの各リサイクルの方式に評価点を付ける。審議会で審議するのは

可能である。

田村委員：評価を出す目的は何か。

森住部会長：客観的にどれが良いか判定して、行政として良いものを選べない問題点を国に要望書を出す。

小林委員：この会議で集まってわかったことについて意見を出した方が良いという話に前回なっていた。

中西委員：それは社会から見た得点付で、生駒市民から見た得点付ではないのではないか。例えば、自分たちが払った税金を有効に使ってほしいなどがある。

森住部会長：費用対効果として、その評価も入ってくる。

田村委員：結果は生駒市民への説明の資料にも使うのか。

森住部会長：客観的資料で、今どの選択が良いかと市民に問うことになる。マテリアルリサイクルしか選択できないのであれば、法改正まで回収しない選択肢もある。その資料を作ることが審議会の役目である。

小林委員：この会議で出た意見を、市民に情報を提示して判断してもらうのが必要ではないかと話していた。

藤堂委員：市民に情報提供して、市民が答える方法はあるのか。

この会議の流れとして、リサイクルをすることは前提だが、市民に諮って法改正まではしないことになるのか。

森住部会長：そうはならない。

藤堂委員：一応するというので、理論的根拠として持っておくと解釈するのか。

では、次年度の全域実施はコストや手続き面で無理なので、実施するのは再来年の4月からとなる。次年度はモデル地区をどうするかということを決めて次回検討する。再来年度からの実施ではパターン2となるが、1年間で状況が整えばパターン1も可能となる。専門部会としては1年後を見据えて、市が関係するものとして、パターン1か4を選択した上で、再来年度に選択したものが、対応不可能であれば当面パターン2で行くことになる。

小林委員：リサイクル方法は選べないので、結論としては仕方がないのはわかっているが、今後、選べるようにするための資料として必要ではないか。

中西委員：その内容は、この専門部会で議論する内容で良いのか。専門に別の検討会を設置する内容ではないかと思う。

田村委員：生駒市が生駒市でできることを国に言っていくことをイメージしているのか。

森住部会長：そのイメージも出来ていないので皆さんで考えていきたい。専門部会の結論を国に問うのも良い。発表そのものが課題である。

中西委員：審議会の結論は、生駒市の市長に対して答申をする。その中に何を盛り込むかである。

森住部会長：この問題は非常に大事なことである。また次回まで考えてきてほしい。

藤堂委員：1月28日（木）午後1時から自治会連合会の集まりがあるので、再来年度から全域収集が始まるという話が出ていることを伝えたらどうか。一年間の期間があるので自治体側の意見も聞きたい。

森住部会長：どうぞ話してほしい。

5 次回の日程について

今回はモデル地区の収集の方向性について議論する。日時は、12月11日（金）午後2時から401・402号室で、来年は1月12日（火）午後1時から及び1月27日（水）午後3時からを予定している。

この議事録が正確であることを証するため、議事録署名人はこれに署名する。

平成22年 月 日

議事録署名人

議事録署名人